
そんな話

宵の明星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな話

【Nコード】

N8422C

【作者名】

宵の明星

【あらすじ】

ある一人の青年が持っている一冊の手帳。そこに彼はなにを書き込むのか。……少し手帳の中を覗いてはみませんか？

始まり

公園のベンチに、古ぼけたコートを着た青年が座っていた。

彼の左手には一冊の黒い手帳。

彼の右手には一本のボールペン。

彼は右手のボールペンを使って左手の手帳になにかを書きこんでいく。

暫くして彼は急にペンを止めなにかを思案しだした。

だが、再び直ぐになにかを書き始める。

……
そんな始まり。

意味

ある所に少女とおじいさんが二人で住んでいました。

毎日おじいさんは牧場で牛や羊達の世話をして、少女は料理・洗濯・掃除などの家事をしていました。

それが二人の主な仕事です。

仕事をしていない時、おじいさんは暖炉の前にある椅子に腰掛け本を読んだり、花壇の花の手入れをしたりしていて、少女は近くの森を散歩したり、草原で寝転んだりしていました。

それはとても穏やかな生活でしたが、少女にとっては同じ事をただ繰り返すだけの退屈な毎日でした。

そんなある日、少女は突然おじいさんにどうして自分は生まれてきたのか聞きました。

おじいさんは、なんでそんな事を聞いたのか少女に尋ねました。

それに対して少女は、毎日同じ事の繰り返しでつまらない。生きている意味など無いとつまらなそうに答えました。

おじいさんは少しの間黙ってなにかを考えていたがやがて少女に向かって、

生きるのに意味が必要かい？

と聞きました。

少女は不思議そうな表情を浮かべました。

意味もないのに生きるなんておかしいと思ったからです。

そんな少女の様子を見ておじいさんは言います。

昔、自分も同じように自分に生きる意味はないと思っていた。
しかし、それでも楽しかった。ただその日の流れに身を任せ毎日
を風のように生きるのが。だから必ずしも生きるのに意味が必要な
人ばかりではないと。

しかし少女は、私はそんな風に意味のない生活を楽しむ事はでき
ない。やっぱり生きる意味が欲しい。

と、口を尖らせながら反論します。

するとおじいさんは、

だったら生きる意味を探す事を生きる意味にすればいい。そうす
ればつまらなくは無くなるし、意味を見付ける事もできる。見付け
た後はそれを次の生きる意味にしていけばいいと言いました。

少女は怒りました。

そんなの生きる意味にならないし、探している間は結局つまらないじゃないかと思ったからです。

そして続けておじいさんに、おじいさん自身の生きる意味はなにが尋ねました。

おじいさんは、少女と共に暮らす毎日だと答えました。

少女はそれ以来、その話をする事は二度とありませんでした。

そして、一日の殆んどの時間をおじいさんと過ごすようになったそうです。

……そんな話。

裁き

人を殺した男が裁かれた。

死刑と言われ首を切断された。

盗みを犯した少年が裁かれた。

死刑と言われ火あぶりにされた。

町の領主様にぶつかった老人がいた。

死刑と言われ首を吊った。

周りから性格が悪いと言われている女がいた。

死刑と言われ銃で蜂の巣にされた。

ある時、一人の若い男が叫んだ。

こんな裁判はおかしい。全く公平じゃない。なんで誰も止めないんだ！！

次の日、その若い男は死刑と言われ崖から突き落とされた。

ある学者は友人に言った。

人は、……いや、この世界に生きる者全ては不完全だ。だから過ちを犯す事もある。それは仕方ない。

問題はその過ちを犯した者達を誰がどう裁くかだ。

裁く者は全てを公平に見定め情に流されることなく裁かなければならない。

しかし、そんな人間などこの世に存在しない。いや、そんな生き物はこの世に存在などしないのだ。

だからと言って過ちを犯した者達をほっとく訳にはいかない。だから人が裁く。

しかし、先程も言ったように人は不完全。そんな者が公平に裁く事などできる訳がない。不完全な者を不完全な者が裁くこの世界は……腐っているな。

次の日、その学者は処刑台の上に立っていました。

友人が昨日の話の事を裁判官に密告したせいで学者は裁判にかけられてしまい、危険な思想の持ち主という理由から死刑を宣告され

たのです。

因みに、その密告した友人も危険な思想家の仲間だったという事で死刑をつけ、毒薬を飲まされ先に死にました。

……そして、処刑人が空高く斧を振り上げた時、学者は処刑台の上で叫びます。

この世界で私を裁ける者など誰一人としていない。

それがたとえ絶対的な権限を持っている裁判官でも、

莫大な資産を持っている貴族でも、

唯一無二の親友でも、

愛し合った恋人でも、

大切な家族でも、

自分自身でも……、

……そして、

……この世の神でさえも……。

……そんな話。

武士道

拙者は誇り高き侍。

武士道を重んじる者。

……いや、侍なら誰しも武士道を重んじて当然なのだが、近頃はそんな当たり前の事さえ忘れてしまっている者も少なくない。

……全く、ふざけた時代になったものだ。

……よし！！ここは拙者が、武士道とはどういうものを改めてこの世に知らしめようではないか！！

……武士道を重んじぬ愚か者は……容赦せぬ！！

金を払えば女・子供であろうとも容赦なく切り捨てる人切り侍がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

商人から金をふんだくろうとしている武士がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

昼間から酒を飲んで酔っぱらっている武士がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

刀を腰に挿し忘れた武士がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

みすぼらしい着物を着た武士がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

浪人がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

武士である拙者に人殺しと暴言を吐いた武士がいた。

……許せん。

直ぐに切り捨てた。

それから暫くして拙者は人を切り殺しすぎたという理由で奉行所

に連れていかれた。

……許せん。

拙者は直ぐにその場で腹を切った。

……そんな話。

自分

……俺は……誰だ？

目を覚ました時、俺は全てを失っていた。

……いわゆる記憶喪失というものだ。

医者が俺の家族だという人達を連れてきた。

……誰だ？ こいつら

その人達がいくら嬉し涙を流したり、抱きしめてきたりしても俺は何も感じなかった。

……だって、こいつらのこと本当に知らないし……

医者は、記憶を取り戻す方法は家族と一緒に暮らして自然に戻るのを待つしかないと言った。

それを聞いて俺の家族だと言った人達は一緒に暮らしてもいいかと聞いた。

……冗談じゃない。なんでこんな見知らぬ奴らと一緒に暮らさなくちゃいけないんだ。

しかし、医者の意見と俺の家族だという奴らの強い要望により俺はこいつらと暮らす事になった。

俺の母親だと言う奴がアルバムを開いて、俺の写った写真を指差しながら俺との思い出を語った。

……知らない。

俺の父親だと言う奴がキャッチボールをしようと言い出した。
なんでも俺が幼い頃よく一緒にやったらしい。

……分からない。

俺の妹だと言う奴と一緒に買い物に行こうと言った。
俺とこうやって買い物するのは久しぶりらしい。
なんだかとても嬉しそうだった。

……思い出せない。

……落ち込んでいる俺に対してあいつらは優しく声をかけてきた。
焦る必要はない。これから少しづつゆっくりと思い出せばいい、
と……。

しかし、俺にはそんな言葉など聞こえてはいなかった。

常に考える事はただ一つ

……俺は誰なんだ……

記憶のない毎日をおくる度に自分は誰なのか、どんな存在なのか
という疑問と不安が大きくなっていく……

更に記憶を思い出せない事の焦りから、不安な気持ちはよりいっ
そう大きくなっていった。

……ていうか、そもそも本当にこいつらは俺の家族なのだろうか？

実は俺を騙すために家族を演じているだけじゃないのだろうか？

……だが、もしそうだとしたらその理由はなんだ？

……金か？

よくテレビとかで保険金目的で人を殺す事件などが報道されているが……

……まさか、俺に多額の保険金をかけて殺すつもりなのか？

それとも復讐か？

実は昔の俺はとんでもなく悪いやつで、その時こいつらになにかしてしまったのか？

クソッ！！ 分からねえッ！！

自分の事も、あいつらの事も、……ああもう、なにかも全部分
かんねえ！！！！！！

分からねえ、分からねえ、分からねえ、分からねえ、分からねえ、
分からねえ、分からねえ、分からねえ、分からねえ、分からねえ……

……もう……分かんねえよ……

……次の日、俺は首を吊った……

……そんな話。

駆ける

とある山に一匹の兎がいました。

その兎は常に仲間の兎達と共に山を駆け、毎日楽しく暮らしていました。

しかし、そんな兎達に危機が迫っていました。

……人間です……

密猟者達が兎達を狩ろうと山へ侵入してきたのです。

兎の仲間達は次々と銃弾に倒れ密猟者達に捕獲されていきます。

……どうして？

……どうして……こんな事……

兎の心は悲しみでいっぱいになりました。

しかし、そんな気持ちなど伝わるわけもなく彼等は獲物を殺し捕まえ続けました。

そんな彼等を見て兎は自分の心が悲しみから憎しみへと変わっていくのを実感しました。

その時、一人の密猟者がその兎がいる事に気付き銃を向けて構えました。

「兎は動かずにただじっと人間の目を見つめます。

……するとどうした事でしよう。

その密猟者は兎と目があつた瞬間、いきなり苦しみだしたかと思うと急にその場に倒れこみ動かなくなっていました。

兎は突然の事に戸惑いましたが、これはきつと神様が人間達に罰を与えるために授けてくれた力なのだと思います。

そして、兎は仲間を殺した人間達へ復讐するため次々と密猟者達をその目を使って殺していきました。

……それから数日後、とある山に人を殺す兎がいるという噂が人間達の間で広まっていました。

あの時、たまたま生き残った密猟者が逃げ帰り山であった事を人々に話したからです。

その噂を聞いて一部の人間がその山へ行こうと言い出しました。

人間は欲深い生物です。

そんな噂が広まれば、

「そんなに珍しいのなら実際に見てみよう」

「捕まえれば金になる」

「殺人兎を殺せば英雄になれるかも……」

といった物好きも出てきます。

そして、欲深い考えを持った人間達は兎を求めて一斉に山へ押し寄せました。

兎は生きるため、そして仲間の復讐のため、再びその目を使って人間を殺し続けました。

しかし、それでも人間達は山へやってきます。

兎は殺しても殺しても再びやってくる人間が怖くなってしまい山から逃げ出してしまいました。

しかし、それでも人間達は兎を追いかけていきます。

そんな人間達から兎は逃げ続け、追いつかれたら殺して逃げる、再び追いつかれたら殺してまた逃げる……そんな事の繰り返し……

…… 兎は必死でした……

この時、兎は駆けながら思いました。

…… いつまで逃げ続けなければいけないのだろう……

…… いつまでこの暗闇を走り続けなければならないのだろう……

…… もう止まりたい……

あの山で仲間達と楽しく暮らしていた時と同じように

…… 静かに休みたい……

…… でも、今ここで立ち止まる事は出来ない

……ここで立ち止まったら人間達の餌にされるだけじゃなく……
なにか……自分の大切ななにかが折れてしまいそうで堪らなく怖い
……

……いつたい……どうすれば……

……いつたい……いつまで……

……いつまで……

……いつまで……

……いつまで……

……
そんな話。

騎士

……ねえ……

「……ん？」

……なんで、戦うの？

「……この国を守りたいからさ」

負けると分かってるのに？

「……」

もう直ぐこの国は滅ぶのに？

「……滅ばないさ」

どうして？

「俺達がいる」

……無理だよ。

「やってみなければ分からない」

分かるよ。

「……何故？」

相手は一億の大軍勢。

対するこっちはたった数百人の騎士だけ。

……絶対に無理だよ。

「……それでも俺は戦う」

……なんで？

「この国を守りたいから」

それはもうさっき聞いた。

僕が聞きたいのはその理由。

「……うーん……この国が好きだから……かな？」

そんな理由にならないよ。

「……理屈じゃないのさ」

……うーん……

「……まあ、お前にもそのうち分かる時がくる」

……そんなの……分からなくていいよ。

「……どうして？」

……だって……あいつらの国はもの凄く巨大なんだよ？

もし今回の戦いに勝ったとしても、きっと同じような大軍勢がまたすぐにやってくる。

だけど、この国にはもうあいつらと戦えるような力なんてない。

……結局、この国は滅ぶしかないんだ……

……それなのに、どうして命を賭けてまでこの国を守ろうとするの？

どうせなくなる物の為に死ぬなんて……意味がない……ただの無駄死にだよ！！

「……」

……

「……うーん……そうかなあ？」

……？

「……いや、本当にそれは無駄なのかな、ってさ……」

……どういう事？

「……えーと……まあ、俺もお前も必ずいつかは死ぬだろ？」

うん。

「それは俺達だけじゃなく他の人達も同じだ。」

そうだね。

人はみんな死んじやうからね。

「……でも、それは人に限らず他の動物や植物もそうだし、……あと、川や湖とかもそうだ」

……え？ 変だよ。

川も湖も生きてないよ？

「え？ …… ああ、だってさ、川も湖もいつかは干上がってなくなるだろ？」

…… ええー？

「…… まあ、とりあえずそういう事にしといてくれ…… じゃないと進まない……」

…… 仕方ないなあ……

「…… えーと…… で、他には俺の家もそつだ」

…… いつかは必ず壊れるから？

「…… おお、正解」

やったね。

「……フフッ……そう、お前の言った通り俺の家も時が経てば崩れてなくなる。……そして、それはこの国も同じだ」

……うん……

「……でも、それはこの国に限った事じゃない。俺達が相手にしている国もそうだし、それ以外の国やどこか知らない遠い場所にある国もそうだ」

……まあ、そうだね。

「そう。つまり、この世界に存在するもの全てがどうせなくなってしまうものって事だな」

そついつ事になるね。

「……そうするとだ。……この世界はあっても意味のない無駄なものだ……で、思わないか？」

……えっ！？ どうして！？

「違うのか？ だってこの世界に存在する全てのものはどうせなくなってしまうものなんだろう？ つまりその存在自体が無駄だって事じゃないか」

えっ？ ええと……それは……

「だったらこの世界は無駄な存在だろ？ ……という事はだ。……この世界で生きている事自体が無駄なわけだから……始めからこんな世界になんて生まれてこなければよかったって事が……」

……ち、違うよ……！

「……どうして？」

だって……ええと……その……生きてると毎日楽しいじゃん……！

「なんで？」

え？ ……う、うーんと……友達と鬼ごっこしたり、かくれんぼしたり……あと、家で絵本を読んだり、ご飯食べたり、お母さんのお手伝いしたり、後は……

「でも、その友達も、絵本も、ご飯も、お母さんも、どうせいつかはなくなってしまう無駄なものなんだろう？」

そ、それは違うよ……！

……確かにどうせいつかはなくなっちゃう……

……でも……だからって無駄なんかじゃない！！

だって……どれも大切な……

「……大切な？」

……

「……えーと、まあ、意地悪はこのくらいにして……つまりそういう事さ」

……全然どういいう事が分からないんだけど……

「……あー、つまりだな。……さっき言ったみたいに確かにこの世界に存在する物はいつか必ずなくなる。でも、だからと言って無駄ってわけじゃない。それらは実はなくなるまでの一瞬の間に大切な何かをたくさん作りだしているんだ。……それはこの国も例外じゃない。俺はこの国に生まれたおかげでとても大切な物とたくさん巡り会う事ができた。……お前と同じようにな」

……うん。

「……俺は、そんな一瞬の間に生まれたかけがえのないもの、そしてかけがえのないものを生み出すものを守りたい。そんなかけがえのないものを俺に与えてくれた大切なものを守りたい。」

それが騎士様にとってこの国なんだね？

「ああ、そうだ。……たとえ無理だといわれても、どれだけ不可能だったとしても黙ってなんかいられない。俺はどんな事があつたとしてもこの国を守る。……守れる、守れないじゃない……守るんだ！！……なんてな」

なんかかつこいいね。

「……え、そうか？……照れるな……」

でも、やっぱり駄目

「……結局、どっちなんだい？」

本当にかつこよくなるのは、騎士様が戦場から生きて帰ってきた時だからね。

「……それは、また難しいな」

難しくなんかないよ。

こんなかつこいい事を言っただから生きて帰ってくるぐらい簡単でしょ？

「……無茶言っなあ……」

この国を守るんでしょ？

だったら生きて帰ってこなくちゃ！！

騎士様が死んじゃったらその後は誰がこの国を守るの？

「うーん……そのうち誰か出てくるんじゃないか？」

それはないと思うけどなあ。

だって全く勝ち目のない相手に戦いを挑むんだよ？

出てくるとしてもそれは今すぐじゃないと思う。

だから、それまでは騎士様に頑張ってもらわないと。

「……責任重大だな……」

そうだね。

「……お前なあ……」

あははっ。

「……ふう……わかった。……ま、全力で頑張ってみるよ」

違うよ。

頑張るんじゃないくて……

「分かってるさ。……必ず生きて帰る」

……絶対だよ。

「ああ、もちろんさ」

そう言つと騎士は戦場へと向かつて行く。

そして、そんな騎士の背中を少年はただじっと見つめていた……

……そんな話。

人形

……僕は……愛していた……

……彼女を……愛していた……

……どんな時でも優しく笑いかけてくれる……

……そんな彼女を愛していた……

……でも、こんな冴えない男に振り向くはずがない……と、そう
思っていた……

……だけど……彼女は僕を愛してくれた……

……嬉しかった……

まさか、彼女が僕の事を愛してくれるなんて……夢にも思わなかった……

だから僕は彼女を大切にした

彼女のために努力した

そして……彼女を心の底から愛した

……でも、ある時から僕の心に変化が生まれた

彼女といてもなにか満たされない……そう思うようになってしまった

……僕は悩んだ……

別に彼女への愛が冷めてしまった訳じゃない

彼女に不満も感じていない

……だったら……どうして……

僕は悩んだ末にその事を彼女に打ち明けた

すると彼女は優しく微笑むと

「それは、あなたがより強い愛を私に求めているからよ」

と言い、優しく僕を抱きしめた

……ああ、そうだったのか……

……ようやく気付いたよ……

そう思いながら僕は同じように彼女を抱きしめる

そして……

彼女を殺した

僕は、彼女の愛が欲しかったんじゃない

彼女そのものが欲しかったんだ

僕が彼女の首に手をかけた時

彼女は少し苦しそうにしながらも僕に微笑みかけてくれた

……ごめんね……

……でも、大丈夫だから……

……苦しいのは一瞬だけ……

……すぐに終わるからね……

……だって……こうすれば……

……君は僕のものになってくれる……

……そして……

……僕達は永遠に結ばれるんだ……

……
ねえ……聞こえる？

……
僕の可愛い人形……

……
僕達はずいに結ばれたんだよ……

……
ねえ……聞いてる？

……
僕の美しい人形……

……これで僕達は永遠に繋がっていられるんだよ……

……こんなに嬉しい事はないよね……

……ああ………なんだか君と踊りたくなってきたよ……

……二人で、この喜びを分かち合いたいんだ……

……ねえ……いいよね？

……それじゃあ、踊ろうか……

……僕だけの人形……

……ああ……君と共に踊れるこの時が……

……僕の……いや、僕達の永遠の幸せ……

……君も……そう思うだろ？

……そして、青年は踊りつづける……

……永遠に動く事のない人形と共に……

……
そんな話。

扉

その部屋に家具や窓は一切なかった

あるとするなら大きな鉄製の扉が一つと私……

あとは全て薄汚れた灰色の壁しか見えない

コンコン

扉を叩く音が聞こえた

誰か扉の向こうにいるらしい

一体、誰なんだろう？

「すみません」

……だれ？

「いえ、ただの通りすがりの旅人ですよ」

そうなの？

「それよりも……あなたはなんでこんな部屋に閉じ込められているのですか？」

……どうしてだと思っ？

「それは……多分あなたはなにかとても悪い事をしてしまったので、その罰としてこの部屋に閉じ込められている………のでしょうか？」

うーん……違うと思う……多分……

「そうなのですか？ ……では一体どういう理由で？」

私も分からないの

「……それはまた不思議ですね……」

不思議よね

「……なにか心当たりはないんですか？」

ないわ

「……随分はつきりと言いますね……」

だって本当にないんだもの

「……困りましたね……」

うーん……だったらそうね……これからあなたも私と一緒に考えてくれないかしら？

……なんで私がここに閉じ込められたのかを……

「はい、いいですよ」

え、ほんとに？

「ええ、私は暇人ですので」

……もしかして、ただ暇つぶしがしたいだけ？

「いえいえ、決してそんな事はないですよ。真剣に考えますから」

……そつは聞こえないけど……まあ、いつか……

「でわ、早速ですがこんなのはどつでしょう？」

考えるの速いわね……それで、一体なにを思いついたの？

「はい、それはですね……実はあなたはとても感染力の高い病気にかかってしまったため、この部屋に隔離されたのではないのでしょうか？」

……そんなの嫌よ

「……嫌と言われましても……」

だって……それってつまり私の病気が他の人へ感染しないように閉じ込めたって事でしょ？

……なんか厄介者あつかいされてるみたいで……嫌だわ……

「そんな事言われましても……あなたの病気を移されてしまった人が死んでしまいかもしれませんし……」

えっ！？ 私のかかってる病気って死んじゃうくらい危ないものなの！？

「え？ いや、こんな場所に隔離する程なのだからきつとそれぐらい重い病気なんじゃないかと思ひまして」

……うそ……それじゃ……私、死んじゃうの？

「それはわかりませんが……その可能性はありますね……」

いーやー！……！！

「落ち着いてください。あくまでこれはあなたがそんな病気に感染していたらという話ですので」

はっ！！　そ、そういえばそうよね……て、そもそもあなたがこんな話をしたのが原因じゃない……！！

「……そんな事をいわれましても……私は考えた結果を言っただけですし……」

あなたね……もう少しまともな理由を考えなさいよ

「いや、あなたが考えてと言ったから私は考えたのですよ?」

……確かあなたは真剣に考えるって言ってなかったかしら?

「……真剣に考えた結果だったのですが……」

もっつ!! あなたって駄目ね!!

「……酷い言われようですね……」

そう思っのならなにかまともな考えを言ってみなさい

「……うん……そうですね……」

……どう？　なにか思いついた？

「はい……あなたの身内の方があなたの事を溺愛していて、あなたを守るためにここに閉じ込めた……」

……ありえないわね……

「……ですね……」

本当に愛しているのなら閉じ込めるなんて事をする必要がないわ

「それに仮にあなたの身内が異常なくらい過保護だったとしてあなたをどこかに閉じ込めようとしたとしても、こんな牢獄のような場所に閉じ込めようとはしないでしょ。きっとあなたが喜びそうな部屋にするはずですよ」

ええ、そうね。……だいたい私の両親はそんな事をする人じゃないし

……それにしても……やっぱりあなた駄目ね……

「いや、次こそはまともな事を言いますよ」

……本当かしら？

「ええ、まかせてください………そうですね………うん………」

でしたら、先程の考えを参考にして……」

どうするのかしら？

「逆にあなたは両親から嫌われていて、あなたが邪魔になり……」

……怒るわよ……

「……もうしわけありません……」

私の両親はそんな人じゃないわ！！
ちゃんと私の事を愛してく
れているわよ！！

普通にね！！

「……はい……ですよね……」

……次は？ ……それとももうないの？

「え、えーと……そうですね……」

「実はあなたはこの場所を知っていて、自分でここにやってきたのですがこの部屋で記憶喪失になってしまった」

……都合のいい話ね……

仮にそうだとして、私はなんでこんな場所に来ようとしてたのよ？

「……一人になりたかった？」

私、それほど孤独を愛してないわよ？

「……失恋とかで……」

そんな記憶はありません

「それも記憶喪失の影響でしょうね」

……やっぱり都合のいい話ね……

「……恐らく記憶喪失になったのは失恋によるショックからでしょう……」

はいはい、次は？

「実はあなたは閉じ込められていなくて、逆に私の方が閉じ込められていた」

……ふざけてるの？

「……すみません……」

はあ……結局駄目じゃない……

「……もうしわけないです……」

もういいわ……今度は私が考えるから

……えーと……うーんと……

「……ちょっとよろしいですか?」

……あーと……え? なに?

「もう一つだけ私の考えを言ってもよろしいでしょうか?」

……えー？

「もうしわけありません。ですが、どうかもう一つだけ……」

……しょうがないなあ……

「ありがとうございます」

……それで、どんな事を思いついたの？

「……はい、それはですね……」

「……あなたは他人に傷つけられるのが怖いのでこの部屋に閉じこもっている……」

……どういう事かしら？

「……いえ、今までの会話の中であなたは一言もその部屋から出たいと言わなかったので……そうかなと……」

……？

「……えーとですね……普通だったらずその部屋から出ようとすると思うんです。気がついたら見知らぬ部屋に閉じ込められていたんですからね。それが当然のはず……しかし、あなたは私に助けを求めようとせず、ここに閉じ込められた理由と一緒に考えてほしいと私に言った。……つまりあなたはその部屋から出るつもりはなかった……それは何故でしょうか？」

……

「……あなたは私と話していて……まあ、楽しいかどうかは分かりませんが少なくとも話していてつまらなそうだという印象はありませんでした。という事はあなたは人と話す事は好きだと考えられます。」

……

「なのであなたはきっと他人と話したいけれども自分の心には深く踏み込んでもらいたくはない……他人の心に触れたいけれども自分は傷つきたくない……だからこの部屋に閉じこもりながら私と話をしていたんじゃないかなあと思ったのですが……」

……

「……いかがでしょうか？」

……ふふっ……

「……？」

…… 凄いわね…… 意外とあなたやるじゃない

「いえいえ、それほどでもありません……と、いうかあなたは始めから私にこの答えを言わせようとしていたのではないのですか？だからこの部屋に閉じ込められている理由と一緒に考えてほしいなんて言ったのでしょうか？」

うふふ…… まあね

でも、少し焦っちゃったわ

あなた全然気付かないんだもの

「いや、普通に気付く事は難しいと思いますよ……うん」

……そうかしら？

「はい……と……」

なにかしら？

「……今でも……怖いですか？」

……そうね……

「……」

……そうでもないかもしれないわね……

「……また曖昧ですね……」

しょうがないじゃない分からないんだから

「……でしたら……試しにその扉を開けてみますか？」

……えっ？

「そうすれば怖くないかわかりますよ？」

……でも……

「まだ私が信じられませんか？」

いや、そういうわけじゃ……

「大丈夫ですよ。……私は絶対にあなたを傷つけませんから……」

……

……私は……静かに扉を開いた……

「こんにちは……お嬢さん」

こんにちは……旅人さん

「……感想はいかがですか？」

……そうね……

……悪くはないわね……

私がそういうと旅人は優しく微笑んだ

……あなた本当に旅人なの？

「ええ、本当に旅人ですよ。ただし心を旅する旅人ですけどね」

心を旅する？

「ええ、私は様々な人の心を渡り歩いているのです」

いい迷惑ね

「……酷いですね……」

だってそうじゃない

勝手に人の心に踏み込んで言いたい放題言っ
て去って行くんでしょ？

心に踏み込まれた方からしたらいい迷惑よ

「まあ、言いたい放題というわけじゃないですけど……確かにそうかもしれないですね……」

……でも……

「……でも？」

私はいいと思うけどね

きっと私みたいに心になにか隠してる人はいっぱいいるはずだから……

……そんな人達の支えになってあげて……

「……でも、さっき迷惑だと……」

人のためになる事だったら迷惑でもいいのよ

「……そういうものですかね？」

そういうものよ

「……やっぱり違うと思うんですけど……」

あゝもう別にいいのよ!!

細かい事は気にしないでやればいいのよやれば!!

「……強引ですね……」

「……さて、そろそろ行くとしますか……」

そうね、行きましょう

「え、ついてくるんですか？」

違うわよ、私は私の世界に戻るって事

「ああ、そういう事ですか……」

という事で……お別れね……

「……そうですね……」

また会えるかしら？

「……そうですね……運がよければですけどね」

そう……じゃあ、また会える事を祈ってるわ

「そうですね……私も祈ってますよ」

じゃあね旅人さん

「じゃあねお嬢さん」

……
そんな話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8422c/>

そんな話

2010年10月11日03時02分発行